

# 井戸王おほきみ小考

河田千代乃

いわゆる「古撰萬葉」(巻第一・二)に歌を列ねる人のなかで、「王」を名乗りながら全くその系譜のわからない人が二人いる。

「軍王」(五・六番歌)と「井戸王」(一九番歌)である。

特に井戸王は、集中第一の女流歌人たる額田王と並んで歌を詠んでいるのに、今まで誰も注目しなかつたのは、どうしたことだろう。

ただ、この人は、集中一九番歌唯一首のみ、「王」を名乗るなら、いずれ天皇の御一族とも考えられるが、「日本書紀」にもその名が見えない。

だから探りようがないと言えばそれまでだが、手がかりがない訳ではない。

並んで歌を詠んでいる額田王がいるではないか。額田王だつてよく解らない人だが、井戸王ほどではない。「書紀」にも掲載されている。

そこで、この額田王を手がかりに、この人と並んで歌を詠んだ

井戸王とは誰かということを考えてみたい。

「萬葉集」巻一に、その二人の歌は記されている。

額田王、近江國に下りし時作る歌、

井戸王のすなはち和する歌

一七 味酒 三輪の山 あをによし 奈良の山の 山の際にい

隠るまで 道の隈 い積るまでに つばらにも 見つつ行

かむを しばしばも 見放けむ山を ころろなく 雲の

隠さふべしや

反歌

一八 三輪山をしかも隠すか 雲だにもころろあらなも 隠さふ

べしや

右一首の歌、山上憶良大夫の類聚歌林に曰はく、都を

近江國に遷す時に三輪山を御覽す御歌なり。日本書

紀に曰はく、六年、丙寅春三月辛酉朔己卯、都を近江

に遷すといへり。

元 綜麻形へそがたの林はやのさきのさ野榛のほりの衣きぬに着きくなす、目めにつくわが背せ

右一首の歌は、今案かんがふるに和あはする歌に似にず。ただし、日本この次つぎに載のす。故ゆゑ以もになほここに載のす。

近江遷都の時、三輪山に別れを告げる歌である。三輪山は単なる山ではない。大和平野最大の国つ神大物主大神の鎮る聖なる山である。その円錐形の秀麗な姿を「綜麻形」と称えている。

初代神武天皇は、この大物主大神の女を太后とされた。以後歴代の大王達は、この大神の守護によって大和を知らしめてきたのであった。

大物主大神は、また、大國主大神が国譲りの際、その和魂にやみたまあるいは幸魂さいたま奇魂きたまとして大和に置いた大神でもあった。

近江国という畿外への遷都は、諸々の事情があったとはいえ、これまで、畿内に都してきた大和大王家にとって、前代未聞、空前絶後ともいうべき大事件であった。

大和平野の最北、奈良山の峠に立つて、額田王は大和の守護神の坐す三輪山に向かつて必死で言い訳めいた歌を詠む。

『あなたを見捨てていくではありません。』と。そして、その歌は、左注によれば、天皇の御製であるとも伝えられている。この人の歌は、ほとんどが天皇の代作である。公的な宮廷行事で天皇や皇后の立場で詠んだ歌が多い。

それに比べて井戸王の歌は、私的である。三輪山を「目につくわが背」と詠んでいる。

左注は、額田王の二首に対して、井戸王の一首を「今案ふるに和する歌に似ず。」と疑っているが、『旧本』がこのようになっていたのでそのまま載せた。」と記している。実はそれでよかったのである。

井戸王の一首は、「和する歌に似ず」どころか、こよなく「和する歌」なのである。左注を付けた人がこの一首を「和する歌に似ず」としながら、それでも切り捨てるようなさかしらをしてきてくれたよかつたと思う。

三輪の大物主神は、麗しい男となって、里の聖なる少女をのみに通い、その少女は神の子を生む。いわゆる「三輪山式神婚譚」である。

大物主神の女である初代皇后伊須氣余理比売以来、歴代の大和大王家の皇后は妃や宮廷の女性達を率いて大物主神の祭祀を続けて来られたのだらう。

こうした女性達のみが、すなわち、大物主神祭祀を執行できる選ばれた女性達のみが、この大神を「わが背」と呼べるのである。井戸王が、三輪山を「目につくわが背」と詠んだのは、そういうことであって、この方は、天皇の皇妃、すなわち、三輪山祭祀に係る巫女的な立場の方と考えられるのである。<sup>①</sup>

だから、まず、「井戸王」は女性であらう。

◆ 次に、この「女性である」井戸王と、やはり「女性である」額

田王とはどのような関係にあったのかを考えてみたい。

額田王という方は、天武天皇紀(巻第二十九)に、

天皇、初め鏡王の女額田姫王を娶して、十市皇女を生ませり。

とある。天皇が大海人皇子といわれた頃、最初に召された妃が「鏡王」女、額田姫王であった。額田王は「鏡王」という人の女であった。「鏡王」は、男性とも女性とも考えられる。代々「鏡王」を名乗り、近江国野洲郡の鏡山に坐す鏡神社を祭祀する家柄であったと考えられている<sup>②</sup>。

この天智朝の頃の「鏡王」には、もう一人女があった。萬葉集に額田王と並んですぐれた歌を詠んだ「鏡王女」その人である。

この「鏡王女」は、額田王の姉と考えられる。天智天皇に召され、後、藤原鎌足の正室となった方である。鎌足の病氣平癒を願って興福寺建立を発願した。没年も伝えられ、その墓は舒明天皇陵の陵域内の円墳として、延喜式に記されている<sup>③</sup>。

「鏡王女」も「額田王」もともに「鏡王の女」と呼ばれていたよつだが、妹は大和の額田という所にいたので「額田王」と呼ばれた。

だからこの姉妹の名は、通称であつて、もとより本名ではない。「菅原孝標の女」というのと同じである。どだい、古代の女性が本名を明かす訳はないので、これ以上穿鑿しても仕方がない。

本名をあばくことが本稿の目的ではないのだが、「鏡王」の

女」である「鏡王女」には、本名でなくとも他に通称というよつな名はなかつたのだろうか。

これにつき、先師西田長男は、集中の次の一首に注目した。

内大臣藤原卿、采女安見兒を娶きし時作る歌一首

われはもや安見兒得たり 皆人の得難にすとふ安見兒得たり

西田は、この「安見兒」こそ「鏡王女」の通称ではなかつたかと推論した<sup>④</sup>。

この一首の前には鏡王女と内大臣鎌足との贈答歌が置かれている。

内大臣藤原卿の鏡王女を媮ふ時、鏡王女、内

大臣に贈る歌一首

玉くしげ覆ふを易み あけて行かば 君が名はあれどわ

が名し惜しも

内大臣藤原卿、鏡王女に報へ贈る歌一首

玉くしげみもろの山のさなかつら さ寝ずはつひにありか

つましじ

天皇より賜つた鏡王女を鎌足が妻問ひし、遂に鏡王女の承諾を得た彼の心からなる快哉の歌、それが「われはもや安見兒得たり」であつた。

西田は「安見兒」は鏡王家の本貫地「野洲」の名をとつた「野洲の兒」であるとした。さらに、西田は「薬師寺縁起」に、額田王を「采女」と記してあることに注目し、この姉妹は「采女」と

して上がったのだが、それも「律令」以前の「采女」で、おそらく「近江令」には「采女」は、妃の系列に入れられていたであろうとしている。

「後宮職員令」に、天皇の妃は「妃・夫人・嬪」とあるが、西田は「近江令」では、「嬪」に当たる者を「采女」と称していたであろうと推論したのである。

「采女」も「嬪」も地方の豪族出身の女達である。中央に召され、妃としてお仕えし、中央の祭祀を学び、再び地方へ帰って中央の祭祀を地方へ伝えた。彼女達は、大和朝廷が古代中央集権国家の礎を築くに当たって重要な役割を果たした。

鏡王家の姉妹も「采女」として召され、天皇に仕えた。姉は、天智天皇に、妹は、大海人皇子に妃として仕えた。そういうことだったと思うのである。

◆  
そしてこの姉妹は、抜群に歌がうまかった。妹の額田王は、宮廷歌人として、天皇や皇后の代作を務めたり、歌合せの判者を務めたりしている。

先に掲げた、内大臣鎌足に贈った歌は、夜明けになっても帰らない鎌足の不作法を、「君が名はあれど我が名し惜しも」とたしなめている。男心をやんわりと受けとめながらもヒシツとやり返す、いわゆる「女歌」の形式がこの人の歌の中に確立している。

それにつけても、この姉妹の名誉のために何としても従来の解釈の誤りを正しておかなければならないことがある。

それは、有名な、蒲生野遊獵歌の解釈についてである。

天皇の蒲生野に遊獵したまふ時、額田王の作る歌

二〇 あかねさす紫野行き標野行き 野守は見ずや 君が袖振る

皇太子の答へませる御歌 明日香宮に天の下知らしめしし 天皇、謚を天武天皇といふ。

二一 むらさきのほへる妹を 憎くあらば 人妻ゆゑにわれ恋

ひめやも

妃に曰はく、天皇七年丁卯夏五月五日、蒲生野に縦獵したまふ。時に大皇弟・諸王・内臣と群臣、悉皆に従なりといへり。

この二首は、天智天皇七年五月五日、近江国蒲生野に於いて催された薬狩の後の宴で詠まれたものである。しかし、長い間、この二首は、額田王の、少女のはじらいにも似た歌い振りや、皇太子の、「むらさきのほへる妹」や「人妻ゆゑにわれ恋ひめやも」という言葉にまどわされた。それは、天智天皇に召された額田王と、かつて夫であった大海人皇子との「秘めたる恋」の歌というような解釈であった。しかし、これは、今は通用しない。

第一、恋の歌であるなら、「相聞」の部立に置かれるはずである。

この歌は「雑歌」の部立にあるのだから、宮廷の公的儀礼の場で詠まれた歌に違いないのである。

この二首は、左注にもある通り、近江朝廷の方々が悉く参加した、宮廷挙げての薬狩の神事のその後、天皇・皇后・諸王・群臣並び居る宴席で詠まれたものである。

この時、額田王の年令は、四十を過ぎ、孫も生まれていたと考えられる。

だから今は、この二首は宴の歌だというのが定説となっているが、その次の「人妻」の解釈がいけない。この言葉の呪縛から解放たれていない注釈者が多い。

皇太子が「人妻」と歌っておられるので、額田王はその時、「他人の妻」即ち、天智天皇の妃となっているとするのであるが、これは全く違うと思う。

額田王が天智天皇に召されたかについては、何の史料もない。だから召されたかも知れない。しかし、もしこの時、額田王が天智天皇の妃だったとして、その天皇の妃である方に対して、いかに皇太子であろうとも「人妻」という言葉で呼べる訳はない。

「人妻」とは、天皇の妃などに使う言葉ではない。それは、庶民の言葉であり、民謡の中に息づく言葉である。

これについては既に論じたことがあるが、民謡の中に、

人妻ゆゑにわれ恋ひぬべし

人妻ゆゑにわれ恋ひにけり

といった表現があつて、このフレーズは当時庶民の間の流行語であつた。そのフレーズを皇太子が使われたものだから、並み居る人々の喝采を博したというようなことだったのだらう。<sup>⑦</sup>

私は、額田王は、天智天皇に召されなかつたと考えている。召されたと考える人がよくその証拠として挙げる次の二首も、既に論じたが、その解釈はどうもうなずけない。

額田王、近江天皇を思ひて作る歌一首

四六 君待つとわが恋ひをれば わが宿のすだれ動かし秋の風吹

鏡王女の作る歌一首

四六 風をだに恋ふるは羨し 風をだに來むとし待たば何か嘆かむ

この二首を、天智天皇の寵愛をめぐつての姉妹の心情を詠んだものとするのであるが、これもよく考えられるとおかしい。

二人の姉妹は、同じ場所に居たのである。

その同じ場所で、普通言われるように、「天皇の寵の衰えた姉の前で、今や寵を恣にしている妹が詠んだ」ということになる。額田王という女は、何とつまらない、高慢チキな女ということになってしまふ。

沈みきつている姉の前で勝ち誇つたようにふるまう妹——額田王の名誉のためにも、こつした解釈は何としてもできない。<sup>⑧</sup>

第一、この二首は、「近江天皇」と、諡号が記されているのだから、もしかしたら、天智天皇崩御後に詠まれたのかも知れないのである。

三 秋山の木の下隠り行く水のわれこそ益さめ 思ほすよりは

鏡王女が天智天皇から賜つた御歌に和した一首である。集中、私の好きな一首である。何と清冽な歌風であるうかと思ふ。

この人の序詞の使い方の巧みなことは、

六 秋の田の穂の上に霧らふ朝霞いつへの方にわが恋ひやまむ  
(磐姫皇后)

と並んで集中双璧ともいえる一首である。

鏡王女の序詞の巧みさは、この人の家庭教師とも養育係とも考  
えられる吹矢刀自の指導によるものかと、これもかつて考えたこ  
とがある。<sup>④</sup>

先に挙げた、姉妹の「近江天皇を偲ぶ歌」に続けて、

吹矢刀自の歌二首

四〇 真野の浦の淀の継ぎ橋 心ゆも思へや妹が夢に見しゆる

四一 川の上のいつ藻の花のいつもいつも来ませわが背子時しけ

めやも

という二首がある。四〇番歌は男から女へ、四一番歌は女から男へ、  
いわば贈答歌の見本のような二首である。吹矢刀自は、集中にも  
一首、

十市皇女、伊勢神宮に参る赴く時に、波多の横山の殿を  
見て吹矢刀自の作る歌

三 川の辺のゆつ岩群に草むさず 常にもがもな常をとめてに  
てがある。三首とも序詞を巧みに使っている。この時、彼女は、額  
田王所生の十市皇女に仕えていたらしい。

以上のことから、私は、吹矢刀自は、鏡王家に仕えた人ではな  
かったかと考えた。鏡王家の二人の姫の養育係として側近く仕え、  
晩年は、額田王が生んだ十市皇女に仕え、壬申の乱で夫大友皇子  
を亡くした失意の皇女を励ましている。

この人が、養育係として、鏡王家の姫達に歌の指導をしたと考  
えれば、鏡王女の序詞の巧みさもさてこそとうなづけるのである。  
しかし、額田王には、この歌風は継がれなかったようである。  
序詞というものが、この時代にあつては、既に一時代昔のもの  
であつたことも確かである。額田王の歌が、当時いかに新風であつ  
たかということである。



井戸王を遠く離れて、額田王と鏡王女のことを考えてきたが、  
ここでようやく井戸王とは誰なのかといつことを考える時が来  
た。

最初にも触れたように、井戸王は女性であろうと思う。しかも、  
大物主大神の鎮る三輪山を「わが背」と呼べる立場にある女性で  
ある。それは、皇后か妃といった方であろうと考えられる。

この時、額田王は、天皇の立場で、「心なく雲の隠さふべしや」  
と詠んだ。これに和して井戸王は「目につくわが背」と詠んだ。  
これは、皇后、妃の立場で詠んでいる。

私は、井戸王が「綜麻形の林のさきのさ野様の衣きぬに着くなす」  
という序詞を使っていることにも注目したいと思う。

額田王の極く身近に居て、天皇の妃の御一人でもあつて、序詞  
に巧みな歌風の女性——このように条件を出してみると、額田王  
とともに奈良山を越えた人は、鏡王女その人以外には考えられな  
い。

井戸王とは「鏡王の女」であつた「鏡王女」の亦の名であつた

かも知れない。

そして更に、考えれば、この時、額田王、井戸王は、二人だけで奈良山を越えたのではなかっただろう。天皇も皇后も諸王、群臣達も一緒だったと考えられる。

いよいよ、三輪山もこれで見納めという地で、一行は興や馬を止め、大和平野を望み、三輪山に別れを告げる儀礼を執行した。

額田王は天皇の、井戸王は皇后の代作を命ぜられ、三輪山とそこに鎮る大物主大神へ、歌を捧げた。だからこそこの歌は、「雑歌」に収録されたのである。

◆  
しかし、奈良山で、三輪の大物主大神へ懇切なる別れを告げただけで、事が済むはずのないことを誰よりも天皇がよく御存知であったと思う。

三輪の大物主神は崇る神である。祭祀が滞れば、疫病を流行らせて民を殺す畏るべき神である。大和大王家の守護神として、祀り祀られ、守り守られてきた長い長い伝統をどうするのか。天皇には、既にこの神を新しい都へ勧請せんとする御心があったと思う。

「書紀」には、それは記されていないが、近江大津宮の北東に聳える靈峰比叡山々麓に鎮る日吉大社に、その伝承がある。

日吉大社は、「古事記」に記す山末の大主大山咋神を祀る古社であるが、一社の伝承として、天智天皇七年、すなわち、近江遷都の年に祝部宇志麻呂によって大和大三輪の大物主神が勧請せら

れたという。これが、現在の西本宮である。

守護神なくして都は都として機能しない。大物主大神を近江に迎えてはじめて近江朝廷は動き出したのである。

井戸王は、鏡王女の亦の名であったかも知れないし、そうではなく別の方であったかも知れない。

しかし、はつきりと言えることは、近江の新しい都の守護神として大物主大神をお迎えする盛大な儀式に、額田王とともにこの人も参列していたということである。

「雲が隠して見えない」と額田王が詠んだのに対して、この人は「いいえ、私の目にははつきりとあなたのお姿が見えます」と詠んだ。

この確信に満ちた言葉は、「すぐに近江にあなたをお迎えいたします。」という、皇妃としての静かな威厳にあふれているように思われるのである。

〔注〕

① 拙稿（但し鈴鹿千代乃の名で執筆した）「歌垣―二、三の覚え書き―」（「悠久」75号・鶴岡八幡宮・平成10年10月）

② 桜井満訳注「万葉集」（上）（旺文社）

③ 延喜式 卷二十一 諸陵寮

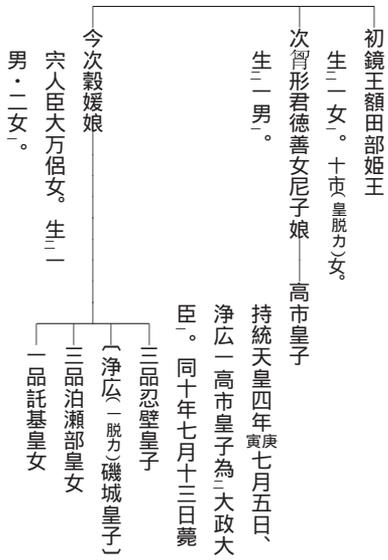
押坂内陵 高市岡本宮御宇舒明天皇、在大和国城上郡。兆域東西九町、南北六町、陵戸三烟。  
押坂墓 田村皇女、在大和国城上郡。舒明天皇陵内。無守戸。  
押坂内墓 大伴皇女、在大和国城上郡。押坂陵域内。無守戸。

押坂墓 鏡女王。在大和國城上郡押坂陵域内東南。無守戸。

④ 西田長男「鏡王女の出自」続編(一)「神道及び神道史」第14號・國學院大學神道史學會・昭和45年3月)

⑤ 「薬師寺縁起」に天武天皇の配偶者として「惣一后・三妃・三夫人・三采女也」として、その「三采女」を、次のように記す。

三采女



- ⑥ 注④に同じ。
- ⑦ ⑧ ⑨ 注①に同じ。